

〔資料〕

フランク・ウイリアム・タウシッグの追想

“Frank William Taussig,” J. A. Schumpeter; A. H. Cole, E. S. Mason. The Quarterly Journal of Economics, Vol. LV, No. 3, May, 1941.

神野 璋 一 郎

夙に其の著『經濟學原理』(“Principles of Economics,” 1911)『合衆國關稅史』(“The Tariff History of the United States”)、等の邦譯を通じて我が國にも遍く紹介されてゐたF・W・タウシッグは、一九四〇年十一月に八十二年の長きに亘る彼の生涯を終つた。其の理論的出發點を古典學派に求め、^(一)而も其の立場は英國に於けるマーシャルに類似せる點、即ちリカードウよりミルを通じマーシャルに至る繼續的進化としての理論的把握を基礎とせる點で彼はアメリカ經濟學の一の顯著な特徴を代表せる學者と言ふ事が出來よう。

フランク・ウイリアム・タウシッグの追想

而も此の八十二年間の全生涯を通じて、其の中の五十二年間は夫れを學者としての生涯に獻けて居るので、即ち「……其の學者としての生涯は廿三歳に於てハーヴァード大學の講師に始まり、七十五歳でヘンリー・リー經濟學講座教授を退くまで、其の期間は五十二年間に及んでゐる」と言はれてゐる。^(二)此の五十二年間に亘る活動の分野は、一般經濟理論は勿論、更に合衆國關稅史、國際貿易論、貨幣問題等廣汎な分野に亘ると共に其の間四十年餘に及んでクオターリー・ジャーナル・オブ・エコノミックスを主宰すると共にアメリカ經濟學會(The American Economic Association)をも指導し其の活動の跡は誠に大なるものがあると言はなければならない。而も彼を特徴付ける重要な點は、單なる抽象的理論の研究者に非ずして、常に彼の其の研究問題の選擇及び其の研究の實行に於て絶えず現實との接觸を保つた事は無視する事は出來ない。

以下に於て紹介する處は、タウシッグ教授の死に當つて、其の長い生涯を追想して、彼の同僚として、而も其の生活にも深い接觸を有したハーヴァード大學のシユムペーターを始めとする三教授によつて執筆された追憶論文であり彼の學者としての生涯を、更に一方に於ては其の私的生活の全般に就ても詳細を語るものと思はれるのである。

註(一) 一般經濟理論上の立場に就てはタウシッグは後の學派によるよりも一層古典派經濟學者……によつて影響を受けた。(The American Economic Review, Vol. XX, No. 1, March 1941, p. 209. "Frank William Taussig, 1859-1940" by Howard S. Ellis)

註(二) Ibid. p. 209.

一、初期(一八五九年—一八八〇年)

吾々が、傑出せる人々の成人して行く場合に於ける其の天賦の性格及び養育、より嚴密に言へば、其の遺傳と環境の有する相對的な重要性に就ていかに考へて見ようともし、タウシッグの場合に於ては此の二つは最も望ましい關係に結ばれてゐたと言ふ事に對しては何等の疑もあり得ないのである。夫れ故他の人の場合に於けるよりも更に、吾々は、人間として、市民として、學者として教師として、更に又官吏として——タウシッグは夫等のすべてであつたが——の其の姿を描寫する際に於ては傳記作者の慣例を採用し、そして先づ第一に兩親の家庭並びに夫れを生み出した二人のすぐれた人物の事を述べなければならぬと考へる。

フランク・ウィリアムの父——即ちウィリアム・タウシッグ(William Taussig)——は一八二六年にブラーグに生れ

た。チェッコ及びドイツ人の間の争鬭が當時絶えず深まり行く暗影を投じ初めてゐた四圍の環境を明らかに嫌つて、此の伶俐な、活動的な、而も立派な教養のある青年は一八四六年に合衆國に移住することに決心した。合衆國に於ては先づニューヨークに、次でセント・ルイスに於て化學藥品販賣業に其の職を得た。これが素晴らしく成功した而も典型的なアメリカ人としての生涯の最初であつた。數年の後には、卸賣商に於ける下級化學藥品の販賣を斷念し、セント・ルイス醫學校に於ける高級化學藥品を研究し、學位を得て、カロンデレット(Calondrette)——現在のサウス・セント・ルイス(South St. Louis)——で開業した。そして藥品とビストルとを其の鞍につけて驕馬によつて病人を訪ねた。社會に於て其の地位が着々と高まり、彼は市長となり、地方裁判所の判事となり、最後には其の首席判事となつた。彼の藥劑業は相當に成功したが、南北戰爭は此の南北境を接する州に堪え難い困難をもたらした。其處で此の強固なユニオニストであり、且つ奴隸制度反對論者たるタウシッグは遂に一八六二年及び六四年の歳入法の下に於て、聯邦諸税の地方徵稅官の地位を引受け、其慰勞金を以て——何となれば此等徵稅官は歩合制度に基いて其仕事を爲し、何等の慰勞金をも得ないか、或ひは又若し彼等が充分の根氣と精力を持つて

ワシントンに赴き頑強に主張すれば可成りの額の慰勞金を得られるかの何れかであつた——彼は其の生涯に於ける第四番目の活動、即ち銀行業の生活を始めた。タウシッグが其の副頭取となつた“*The Traders' National Bank of St. Louis*”は多少成功したに過ぎなかつた。しかし乍ら、其の顧客達の間で、ミシシッピ河に架する橋梁を建造する爲に橋梁會社が組織された。タウシッグは此の後の事業に参加し順次に其の會社の會計課長及び總支配人となつた。そしてこれが彼の第五番目の生活の最初であつた。夫れは彼を著名にし繁榮せしめるものであつた。此の橋梁會社と言ふ企業は最初から成功であり、且つ最後には發展しつゝ“*The Terminal Railroad Association of St. Louis*”となつたが、夫れはセント・ルイス市に入つて来るあらゆる鐵道に就ての合同停車場を建設し、其の所有の機關車を以て西部向けの貨物をイースト・セント・ルイス(*East St. Louis*)から終點に運搬した。市の有力者達並びに鐵道當事者が此の計畫の途中で行つたあらゆる妨害を克服したものはタウシッグの精力と其の豊富な智識とであつた。萬事が完遂され、あらゆる闘ひの終つた時、彼は當然の順序にしたがつて其の社長に選ばれた。夫れは落着いた、而も品位のある地位で、彼は其の地位を退いたのは一八九六年であつたが、當時七十歳と言

フランク・ウィリアム・タウシッグの追想

ふ可成りの老齡に達してゐた。而し尙ほ各種の公民としての活動に多忙を極め、廣く人望があり、敬服され、尊敬されて一九一三年迄在世して居つた。

フランク・ウィリアムの母、即ちアデレ・ウェルベル(*Adèle Wuerpel*)はライン河畔にある一村落のプロテスタントの傳道師の娘であつたが、此の傳道師は一八四八年の革命中に解雇され、こゝに於て其の家族を伴つて(合衆國に)移住した。タウシッグは彼女と結婚したのは一八五七年であつた。其の結婚は非常に幸福なものであつた。彼女は愛嬌に富む婦人であつたに相違なかつた。——即ち有能且つ溫厚な、眉目美はしく且つ善良な、而も快活にして愛情のある婦人、換言すれば、逆境にあつては慰藉ともなり、成功の曉に於ては伴侶となる婦人であつたに相違なかつた。彼女は立派なメッソ・ソプラノの聲を持ち、彼女の夫が音楽に對して持つ愛好心を彼女も亦分け持つてゐた。彼女の發する光輝に暖められた家庭の中では何等の問題も起つた様には見えなかつた。彼女が其の夫並びに三人の子供——即ち此の回想録の主人公たるフランク・ウィリアム、彼に先立つて逝つた其の弟、及び彼よりも後まで生存してゐる其の妹を指して居る、——の爲に造り出した様な家庭(夫れは最初は質素な、後には富裕な境遇となつたのであるが)を想像する事

は極めて容易である。而して上述の彼女の夫及其の三人の子供達は彼女に全く深い愛着を感じてゐた。夫れは協同生活を充分に意識してゐる家族を支へるに全く充分な家庭であつた。かゝる家庭から生れたフランク・ウィリアムは、彼にとつては諸々の計畫に於て家庭生活並びに家庭的な責務が本質的なものであり、其の事を確信せる家庭人であつた事には不思議はない。

吾々の豫想する如く、彼フランク・ウィリアムは幸福な少年時代を持つたのである。其の上、彼の妹が述べてゐる如く『彼が學校に於て、又其の研究に於て立派な進歩を示した事に就ては全く疑ふ處はない。そして又吾々の知つてゐる如く彼の大柄の肉體は幼少の時に示されてゐた。私は彼が大柄の少年だつた事を記憶してゐる。私は又、彼が勉強の爲にか、或ひは氣晴らしの爲に常に其の手に書物を持つてゐた事をも記憶してゐる。そして又私の記憶する處では、彼が讀書をしてゐる間は、彼が直接に興味をそゝられぬ限りは、何物も彼の氣を他に外らせる事はなかつた。家族の者の居間で仕事をし、勉強するのが彼の習慣であつた。……學校に關しては、確かに彼が大體十一歳になる迄は小學校 (Public School) に居つた。其の後は彼はスミス・アカデミー (Smith Academy) と呼ばれる學校に行つた。……何時も吾々の家庭では音楽を大いにやつた。ルビンシ

ュタイン (Rubinstein) 及ヴィニアウスキー (Winawski) の如き藝術家達には吾々は會つて居り、又テオドル・トーマス (Theodore Thomas) はセント・ルイスに來た時には何時も吾々の家庭にやつて來た。フランクは其のヴァイオリンの練習をずつと早くから始めた事は確かであつた。セント・ルイスに於ける當時最も著名なヴァイオリニストは吾々の家族とは親友であり、又彼ウィリアム・フランクの先生であつた。そしてフランクはカレッヂに進んだ時にはヴァイオリニストとしても大いに上達してゐた。そしてカレッヂに於ては、全く定期的に弦樂四重奏の一員として演奏し、又バイエリアンの一員でもあつた。音楽は彼の生活に於ける喜びの一であり、又休養の一でもあつた。……夏の遠足を除いては旅行はしなかつた。』^(四)

一八七一年、チャールズ・C・バーリンガム氏 (Mr. Charles C. Burlingham) とフランク・タウシッグの生涯に互る親交が初まつた。當時彼等はスミス・アカデミーに於て級友であつた。共に彼等はワシントン大學に入學し、一八七六年には相携へてハーバードに移つた。學長のチャールズ・F・ダンバー (Charles F. Dunbar) は好意を示して、彼等を試験する事なくして二年の上級に入學を許した。尤も彼等二人は一年級に入るにも入學試験を受ける事を豫期してゐた。タウシッグはバー

リンガムにとつては『宮殿の如く宏壯な』住居と思はれる宿舎をオックスフォード・ストリートに選定し、優秀な學生となつた。彼は經濟學に於ける各過程を學び、一當時經濟學とは、

“Political Economy” となつてゐたが、更に又多くの歴史をも學んだ。そして一八七六年には後者即ち歴史の分野に於ては『最優等』で卒業した。彼は『卒業式の諸行事』の一を受持つて講演したが、其の論題は “The new empire in Germany” と言ふのであつた。そして “Phi Beta Kappa” に選ばれた。一八七八年から七九年の間に彼は其の書庫から主として歴史並びに哲學に關する莫大な數に上る書物を取除いた事を示すに足る記録があるけれども、然し彼は世捨人ではなかつた。彼は其のクラスの野球のチームに入つて夫れを行ひ、スクラッチ・レースに於ては六人漕ぎの組の一人として參加し、六つの學生のクラブ及び社交團體に參加し、あらゆる人々と親密に交つた。そして勿論この中にはヴァイオリンもあつた。

バチエラー・オヴ・アーツを得た後、ヨーロッパへの旅に上つた。今一人の生涯の友即ち、E・C・フェルトン (E. C. Felton) と共に一八七九年九月に出發した。數週間を共にロンドンで過した後、吾々は分れた。私はドイツに赴き、十月より翌年三月迄の冬をベルリン大學で過し、其處でローマ法及び經

濟學を學んだ。(七) 三月にはドイツを出發し、イタリーで再びフェルトンと一しよになつた。吾々は共にイタリーで二ヶ月を過し

夫れから途中ジュネーブを通つてパリに赴いた。パリに於て、五月に、吾々は再び分れ、フェルトンは歸途イギリスに赴いたが、一方私はヨーロッパの様々の地方、主としてオースタリ及びスイスの各地方を旅行した。(八) と直ぐ其の後でダウシツグは書いてゐた。ヨーロッパに旅行中に發表されたニューヨーク・ネーション誌 (The New York Nation) 上の若干の論文は此の青年の眞面目であつた事を證明し若しも夫れに對する證明が必要とされるならば一してゐる。

一八八〇年九月に彼がハーヴァードに歸つた時、彼は法學部に入る目的を以て其の事を實行した。當時彼は明確に専門の仕事としては經濟學である事を判然と語つてゐなかつた。法律は尙ほ彼にとつては經濟學と同じ位に、或ひは夫れ以上に意味を有してゐた。然るに彼は總長エリオット (Eliot) の秘書と言ふ地位を與へられ、夫れを受諾した。一此の地位は全時間を夫れに捧げる仕事ではなかつたけれども骨の折れるものであり、夫れは大學の行政及び政策に就ての祕密を彼に知らしめたものであつた。(九) かくて彼は其の後の六十年間に互つて彼の生活にとつては中心的なものとなつた仕事を始める事となつた。

註(一) ビストルは當時大いに必要であつた様に思はれる。彼の息子(即ちこの論文の主人公F・W・タウシッグ)は、ビストルを持たなくなつた後も、當時の事を述べる序に、好んで、彼の父が『ビストルを撃つ爲に』其の妻を呼んで一しよに屋外に出た事を語つてゐる。

註(二) 彼の息即ちF・W・タウシッグの追想する處によれば彼の父はワシントンに赴き、其處で彼の計算書を傍に置いて、来る日も、来る日も毎日、大蔵省の階段に坐つて、遂には其の言ふ處が通され、彼の當然に受けるべき金額を得た。

註(三) 如何に彼が商賣上の能力に於て鋭敏な能力を有したかを示すものとしては、次に述べる逸話からも推論されるであらう。此の橋梁會社がカーネギーの工場から曾て鋼鐵のシリダーを購入した事があつた。其の際其の引渡しに就てある厄介な事が生じ、タウシッグ(父)はアンドリュ・カーネギー(Andrew Carnegie)自身と此の問題を片付ける目的でピッツバーグ(Pittsburgh)に出かけた。彼の主張は何であらうと、その全部を成功裡に遂行した。——其の結果はカーネギーは協力を與へた。

註(四) Letters from Mr. Alfred Brandeis to Professor Mason.

註(五) "Phi Beta Kappa" 全米國に亘る學生の團體で成績其他の條件を具へた學生が其のメンバー選ばれるのである。

註(六) ペンシルヴァニア製鋼會社(The Pennsylvania Steel Works)の創立者G・M・フェルトン(G. M. Felton)の息。

註(七) 此の事は止むを得ず社會政策學會(Verein für Sozialpolitik)によつて支持された保守的改革の原則と交渉を有つた事を意味してゐると言ふ事は充分述べて置く價值がある。タウシッグは常にアドルフ・ワグナー(Adolph Wagner)の影響を認め、且つ最後までワグナーに對し同情と尊敬の感を持つてゐた。彼等は實際に會つたか否かは吾々は知らない。

註(八) "The Publications of the Class of '79, Secretary's Report, Commencement, 1883" 參照。一八八五年の卒業式に於ける報告書に於ては、フェルトンは更に彼の註釋を加へ、夫れは彼等はロンドンに於て『大いに』愉快であつたと言ふ事實を立證してゐる。

註(九) 此の期に於ける最初の成果の中には、『一八七九年より一八八二年に至るハーヴァード大學』("The University, 1879-1882")に關する十四頁の報告があり、夫れは"The Report of the Class of '79, Commencement 1883"の中にタウシッグによつて發表されてゐる。

二、成年期(一八八一年—一九〇〇年)

秘書としての彼の勤務は暫時法律を研究せんとするタウシッグの計畫を妨げた。然し夫れは彼にとつては經濟學に於てドクトル・オヴ・フィロソフィーの學位を得る爲に盡すに充分な餘

分の精力を費す事となつた。彼が選んだ特殊の問題はアメリカ關稅立法史であつた。彼の選んだ此の問題は、彼の科學的關心と言ふ點では經濟政策に於ける最高の重要性を示すものであつたと同様に、彼の精神的方面に於ては其の史的諸要素の有する重要性を示すものであつた。こゝでは此等二つの點を強調する事が必要であり、——其の後に於ても必要であらう。確かにタウシッグはすぐれた理論家であり、又理論に就ては極めて偉大な祖述者でもあつた。しかし彼が講じた理論の形態に對して其の後提起された處の制度學派の反對は、彼の行つた仕事の一部は制度學派の線に沿つてゐたと言ふ事並びに、主要な點に於て彼を反對者（制度學派の）と考へるよりは、彼を以て其の指導者と主張する方が一層正しかつたと言ふ事を看過してゐた様に見えた。彼にとつては、經濟學とは常にポリチカル・エコノミーであつたのである。彼の初期の教育及び其の全般的準備は唯に理論的であつたと同様に又歴史的な方面にも互つてゐたと言ふのみではなかつた。夫等は元來歴史的なものであつた。其の史的、立法的、政治的、要するに其の制度上の側面に於ける實際問題は、これ迄他の如何なる精緻なる理論が彼の興味をそそつたよりも更に一層の彼の興味を唆つた。そして彼を知る者は誰一人として問題を社會學的方面に於て、更に又其の史的諸

觀點に於て洞察する彼の能力を賞讃せざるものではなかつた。⁽¹⁾ 彼が其の選んだ問題即ち國際貿易を研究した處の精神は全く史的考察に基く精神であつた。

『合衆國に於て適用せられたる幼稚産業に對する保護』(Protection to young industries as applied in the United States)に關する一八八二年の縣賞當選論文はドクトル・オヴ・フィロソフィーの學位論文となり一八八三年には一冊の書物として出版された。夫れは立派な書物であつたが故に一八八四年には第二版が必要とされた。其の有する處は理論は極めて少なかつたけれども、事實の分析に於ては優れたものであつた。此の論文執筆と言ふ仕事には偶々今一つの側面があり、夫れは非常に特徴的である爲夫れを見逃す事は出来ない。即ち其の側面とは關稅政策の分野に於て彼が將來卓越せる事の前兆となる夫れであつた。即ち夫れは經濟學者としての彼の偉大なる事を示す上で極めて重要な要素となり、且つ彼タウシッグが尙ほ僅か廿三歳の時に於て書かれた彼の書物に於て全く驚くべき程度に迄現はれてゐる處のあの批判の公平なる事及び其の圓熟せる事である。經濟上の得策と言ふ理由に基くと同様に、又政治的の道義と云ふ理由に於ても、タウシッグは此の合衆國の關稅立法には決して賛成してゐなかつた。彼は全く言葉の普通の意味に

於ける保護貿易論者ではなかつた。しかし又、彼は自由貿易論者でもなかつた。彼は保護貿易論者の論議に於ても支持し得ると考へられるものは何でも率直に認め、——特に絶對的のと言ふのではないが、幼稚産業に就ての論に就てはさうであつた。——自由貿易論に賛成する經濟學者達が行ふ習慣になつてゐる様に保護貿易論者の主張を輕視する様な事は決してやらなかつた。此の後者の如き方法は彼のやり方ではなかつた。他の如何なる問題に就ても行つたと同様に、彼は其の問題を研究するには實際的、並びに批判的の二つの態度を以てした。

次の十年或ひは夫れ以上の間は、彼の獨創的な仕事はかくの如く幸先よく開かれた線に沿つて進んだ。幼稚産業に對する保護に關する著書に續くものは『一八六〇年—一八八三年間の現行關稅史』(一八八五年刊行)('The History of the Present Tariff, 1860-1883', 1885)であり、夫等上述の二著は『合衆國關稅史』(一八八八年に刊行され、其の後度々版を重ね一九三一年には第八版に及んだ)と言ふあの名著となつた。此の『合衆國關稅史』は其の分野に於けるアメリカの第一流の權威者としての彼の名聲を打樹て、更に夫れは又政治的・經濟的分析としては、事實上如何なる分野に於ても夫れに勝るものを見ないのである。當時彼の執筆せる多數の論文も亦關稅問題を取扱

つて居る。然し夫等の期間に於ける國家の其他の諸問題も彼の積極性が有つ注意を惹き付けざるを得ず、かくして夫等諸問題の中の二つに關してはタウシツグは重要な貢獻を爲した。銀問題に就ての經濟上並びに政治上の諸側面は彼の心を大いに奮起せしめた様に思はれる。彼は何時もの徹底さを以て問題を習得し、一八九〇年には其の分野に於て數多くの著書の出版に着手し、一八九一年には、『合衆國に於ける銀問題』('The Silver Situation in the United States')に關する著書を公にしたが、夫れは銀非採用論の側に於ける基本的な勞作となり、更に全文明國に對し強い影響を及ぼした。更に又一八九一年には此のジャーナル('Quarterly Journal of Economics'を指す)に『鐵道運賃論』('Contribution to the Theory of railroad rates')を發表した。一八九三年迄に彼が發表せる全論文中唯一つ此の論文のみは、純理論的討究に關する研究を示すもので、而も尙ほ夫れすらも『實際の』問題に關係するものであつた。彼の諸著作は、確かに當時存在してゐた經濟學に關する分析に必要な諸機關を充分に使用し盡してゐる事を示してゐる。しかし乍ら、彼は夫れを容易に使用したけれども、彼が卅歳を可成り超える迄は夫れに對して特に深い興味を抱いてゐたとは思へないのである。

此の事實に關して、彼が一八八四年に、エミール・ド・ラヴレーの『經濟學要綱』(Emile de Laveleye "Elements of Political Economy")の翻譯の爲に書いた序文に極めて傳記の上からは興味のある事が附記されてゐる。⁽¹⁾此の序文は恐らくはタウシッグが當時抱いてゐた處の方法論上の見解に就ての唯一の資料となるものである。而して夫れは經濟政策全般に就ての彼の見解に關する他の諸資料から吾々が知る處のものを補足するに役立つものである。更に亦夫れは此の人即ちタウシッグの特徴を著しく現はしたものである。吾々の多くはかゝる序文の中に於ては、其の言ふ處は全く御世辭に限るか、さもなくば其の序文を全然書かないかの何れかであらう。しかしタウシッグはさうではなかつた。勿論其の書いた序文の中には御世辭もあつた。しかし夫れは簡潔に最少限に限られ、其の残つた點に關しては、常に丁寧にはあるが、異議を唱へ又批判をする事をも避けなかつた。タウシッグは彼にとつて誤謬と考へられるものは夫れを指摘してゐる。彼はラヴレーのある見解が『正當と認める事が出來ぬ』と考へた場合⁽²⁾には卒直に夫れを述べてゐる。ラヴレーは他の人々程に全く『古典學派の體系』と言はれてゐるものから脱却してゐる事』の無いと言ふ理由から、タウシッグは彼(ラヴレー)を稱讃してゐる。又タウシッグは此の著者の自由

放任に對する諸批判並びに國家の干渉に對する主張に對しては慎重な同意を與へてゐる。尤もタウシッグの見解に於ては、彼の持つ人道主義的感情は『ラヴレーを極端ならしめ過ぎた』⁽³⁾様にも思はれる。『具體的な事』並びに『現實の事實に對する注意』と言ふ點は同意してゐるが、しかし少くともある一節に於ては、『鋭き洞察』の缺如してゐるとの理由によつてラヴレーの論議は批判されてゐる。——勿論夫れは全く當然過ぎる程であつた。

タウシッグ自身の公にせる著作に關する限りでは、學說に對する理論家の關心を最初に示すものは一八九三年に現はれてゐる。其の年即ち一八九三年のアメリカ經濟學會(The American Economic Association)の刊行物に彼が寄稿した二篇の論文、即ち『リカード論』("Interpretation of Ricardo")及び『マースヤル教授の價值及分配論に就て』("Value and Distribution as treated by Professor Marshall")は巧妙な結果を與へて彼の止まるべき場所を明かにしてゐる。最初の論文はタウシッグにとつてはリカードはすべての經濟學者の中で最も偉大なものであつたと言ふ事を簡明に吾々に知らせてゐる。而してあの偉大な理論家即ち『リカード』論から、何故——當時のタウシッグにとり、更に又タウシッグの全生涯を通じて——リカードの唯一の對立者はボエーム・バヴェル

ク (Bohm-Bawerk) であつたかを推論する事が出来るのである。(三) 此等三人の偉大な人々の心構へに於ては根本的な類似があり、夫れがタウシッグをして他の諸理論家の見解並びに事業に就ては論議せしめず、更に其の價值を認めしめなかつたに拘はらず、リカード以外の他の二人の見解——言はゞ理論上の夫れ——及び事業を論議せしめ、且つ其の價值を認めさせたのであつた。第二の論文 (マーシャルに關するもの) は同様の明瞭さを以て、其の場で直ちにマーシャル學派の教ふる處を以て彼の受持つ教室の事業の主要な研究資料の一として採用しつつ、夫れに同意する上での條件を示してゐる。此の點に就ては吾々は更に後に答へるであらう。

暫く、吾々は一八九四年のアメリカ經濟學會總會の議事録に發表されてゐる更に二つの他の論文に就てのみ記す事にしよう。夫等は理論上のタウシッグの創作を支配してゐた處の特徴を示してゐる。『利子及び利潤の關係』並びに『ドイツの經濟學者達の許に於ける貨銀基金』は、彼が當時『貨銀と資本』なる論題に關して書きつゝあつた著作よりの片影であり、且つ夫等は「一八九六年に後の標題(即ち『貨銀と資本』—「Wage and Capital」)—を持つた一冊の書物として公刊した學說體系の準備をなすものであつた。次の年、即ち一八九五年のアメリカ經

濟學會總會の議事録に現はれた『貨幣數量説』に關する論文は特にタウシッグの理論と言はれ得るであらう處のものに就ての基礎を作り上げてゐた。

然し吾々は再び大學に於けるタウシッグの生活に立返る事にしよう。一八八一年より一八九六年に至る期間は明かに精一杯の骨を折つた年であつた。——若しも讀者が彼の純然たる職業上に於ける諸活動に、更に加ふるにシヴィル・サーヴィス・レコード (Civil Service Record) の編輯部の一員に彼が加はつた事、ボストン・ヘラルド (Boston Herald) のアドヴァタイザー (The Advertiser) 並びにネーション (The Nation) に論文を投稿せる事、並びにコブデン・クラブ (The Cobden Club) 及びイサチュセッツ、リフォーム・クラブ (The Massachusetts Reform Club) の會報に參與した事を見るならば一層然りである。確かに頑強な體格を有し、且つ健全ではあつたが、尙ほ疲勞を知らぬ程強くなかつた此の人にとつては、夫等上述の仕事は適當であつたと言ふよりは、むしろ骨の折れる仕事であつた。尤も彼は音樂に對する興味を持ちつづける餘暇があつた様に思はれるけれども、休養と氣晴らしの爲に充分の機會を有つ事はなかつた。

間もなく、——更に詳しく言へば、一八八二年三月に——彼

は一八八二年から八三年に亘つて經濟學の講師に任命された。更に此の任命の重要な事は、其の學年の間、經濟學の唯一の專任教授たるチャールズ・F・ダンバー (Charles R. Dunbar) が居なかつた事によつて更に高められたのであつた。就中、此の事は、(經濟學の) 初歩の課程 (現在の經濟學A講座) が一青年タウシッグに託された事を意味したのであつた。

吾々はこゝで再びタウシッグの傳記からは省略される事の出來ないあの優れた人の名前に出會した。^(四)ダンバー (Dunbar)

は唯に、彼タウシッグを、彼が後に傑出せる指導者となるべき學問の分野に引入れた教師と言ふだけではなかつた。ダンバーの有したタウシッグの發展に及ぼせる影響は事實夫れ自體が意味するよりも、更に大きく役立つたのであつた。若し吾々が彼ダンバーの若干の諸論文と、タウシッグの初期の關稅に關する勞作とを比較するならば、其の調子、精神並びに其の研究方法に於て、此等二人の間に可成りの類似のある事を認めざるを得ないのである。『フランクの前途を豫斷し、自己の後繼者として彼 (タウシッグ) を拾ひ上げたのはダンバー教授であつた。彼 (ダンバー) はボストン・デイル・アドヴァタイザー (The Boston Daily Advertiser) の主筆であつた。而して總長エリオットが、其の當時まで道德哲學の一分科としてフランチス

(フアンニー) ボウエン (Francis Fanny Bowen) によつて教授されてゐた經濟學の教授となる事を彼 (ダンバー) に説得した當時、ダンバーは引退して農村に居つた。^(五)タウシッグがダンバーの受持つてゐた課程の一を助けたが故に、タウシッグを講師の職に任命せる事に就ては後者 (ダンバー) の推薦が大いに役立つたと考へて間違ひはない。

ダンバーの復歸後に於ては、前途の見込は以前程に明るくなかつた事は明かであつた。ハーバード大學の職員の序列中、最下位にある實際に有能な、且つ活動的な青年は誰しも、——彼タウシッグが目下直面してゐる如く——期限の當もなく、全く思ひ通りに行かぬ地位と、其の前に開けてゐる他の生活の有つ魅力的なチャンスの何れに定着するかと言ふ事に關しての困難な選擇に直面した。^(六)タウシッグは、一八八六年六月にドクトル・

オヴ・フィロソフィの學位を得た後、同年九月に、囑託としての講師の任命を拜命し (夫れは關稅立法についての半學年間の講義をするためのものであつた)、そして『正規の三年間の課程を修めて、學業を終へた後には實地に開業しようとの目的から』ハーヴァード大學法學部に入學する事によつて此の問題を一時的には解決した。^(七)此の講師としての取極めは一八八六年六月に彼が法學士の學位を得る迄續いた。しかし夫れに先立つ數ヶ月

前にハーバード大學當局は其の事情を考へ直し、そして彼タウシッグが専任の講師の職を受諾する事を拒絶するや、彼を經濟學助教として任命し其の任期を五ヶ年とした。

全く世俗的な觀點より見れば、——結局は不必要なものであつた處の豫防的な手段であつたと言ふ意味に於ては——法律學と言ふ協道に入つた事は夫れ故に一の損失であつた。しかし吾吾にとつてはこの法律上の素養がタウシッグの心構へに對して與へた寄與を力説する義務がある。今日の經濟學者が彼の専門の分野に精通する上に大いに必要とされるであらう處の時間と精力の費消からどれだけのものを得るべきかと言ふ事は議論の餘地のある問題である。しかしタウシッグの青年期に於ては、利益、不利益のバランスと言ふものは異つてゐた。經濟學は夫れを習得するに相當の年月を必要とする如き技術を有してゐなかつた。多方面に互る能力が目標であり、又持つべき合理的な理想であつた。其の上法律上の素養は當時に於ては、夫れによつて經濟學者が其の知力を『測定せしめ得る』處の最後の有效な手段であつた。最後に、法律の助けによつて精通する種類の諸事實は、確かに經濟學者の仕事と關聯を有してゐる。特に、タウシッグの場合に於てそうであつた如くに、若しもローマ法が研究の中に加へられるならば、問題の研究に就ての制度上の側面

に於ける利益は常に相當大なるものであるに相違ない。今やタウシッグの場合を見るに、正しく夫等の利益を充分に利用する心構へにあつた。實際に、かゝる上述の有する意味をよく知つてゐる觀察者の誰れにとつても、タウシッグの教授並びに研究と言ふ双方の彼の仕事に於ては、法律的な觀點と言ふもののある事が分つたのである。

彼は一八八六年秋に、彼の正式の職務——夫れは實際には専任教授としての職務であつたが——を始めた。關稅立法に關する半學年間の講義は續けられ、^(八)概論的な初歩の講座が彼に引渡され、^(九)かくて彼の有名な『經濟學第十一講座』^(一〇)後にそうなつたものであるが、^(一一)が其の著名な道程の緒に着いた。其の他の諸講座が時々附加された。

やがて(一八九二年)續いて専任教授への昇進があつた。そして一九〇一年には、新たに設けられたヘンリー・リー・講座教授の地位(Henry Lee Professorship)が彼に授けられた。彼は其の時になつて始めて、『自分はケムブリッジに住み、死す迄ハーヴァードの爲に働く事を欲するであらう。』と書いた。^(一二)然し乍ら、實際に一八八六年の任命は唯に決定的なものであつたのみならず、又タウシッグがそうするであらうと考へて間違ない徵候もあるのである。彼はこゝに落着く事となつた。一八

九〇年のクラス・レポートに於ては、彼はきつぱりと、一八八六年以來『大學教授として平穩な生活を送つて來た』と述べてゐる。此の、上に述べた一節の調子の中には單に満足のみがあるに過ぎないのか、或ひは又、落着いた安堵の如きものもあるのであらうか。更に亦、遠い晩年に至る迄動搖する事なく持續したに相違ない處のあのハーヴァードに對する深い愛着を更に示す印として、吾々は次の如き文句を引用して見よう。『自分は幸運にも全く丁度よい時に任命されて、當大學創立二百五十年記念祭の祝典に關係する事が出來た。而して當時自分は大學の教授團の中で最も若年の一員であつた故に、創立三百年記念祭の時が來たならば、其の時には他の何れの人々よりも夫れに關係するにはもつと都合の良いチャンス有するであらうと思はれる。』と。

一八八八年六月廿九日に、彼タウシッグはニュー・ハムプシヤー州のエクゼター (Exeter) に於てポストンのエディス・トーマス・ギルド (Miss Edith Thomas Guild) と結婚した。彼等の長男ウィリアム・ギルド・タウシッグ (William Guild Tausig) は一八八九年に生れた。其の年(一八八九年)の夏には、彼は當時のノートン・エステート (Norton Estate) として知られてゐた處(スコット・ストリート二番地)に家を建て、

フランク・ウィリアム・タウシッグの追想

『こゝで今後の長い間を平穩に生活せん事』を希望した。(111) 長女のマリー・ギルド (Mary Guild) (後にジェラルド・C・ヘンダーソン Gerald C. Henderson 一に嫁いだ) は一八九二年に生れ、次女カザリン・クロムビー (Catherine Crombie) 目下レドヴァース・オビー博士 (Dr. Redvers Orie 夫人) は一八九六年に生れ、更に第三女ヘレン・ブルックス (Helen Brooks) (今日迄何年間か、醫學博士として、ボルチモアのジョン・ホプキンス病院に於て小兒科醫をしてゐる) は一八九八年に生れた。

彼の講義及研究以外にも、種々の活動が急流の如く彼の許に殺倒してゐた。彼は常に論文を執筆し、無税銀輸入に對しては熱心に闘争し、ケムブリッジ學校委員會 (Cambridge School Committee) の一員として活動し、マサチュセッツ州税法に關する知事諮問委員會の一員として、又インディアナポリス貨幣會議 (Indianapolis Monetary Convention) に對するポストン商業組合 (Boston Merchant Association) の代表として活動し、其他色々の仕事をやつた。彼は又大學の行政事務に就ても自己の擔當分を行つたが、しかし其の仕事は決して彼の重大な關心を有するものゝ一つではなかつた。(112) 一八八八年には、彼はアメリカ學術協會 (American Academy of

Arts and Science) の會員に選ばれ、又一八八五年には英國經濟學會 (British Economic Association) (王立經濟學協會—Royal Economic Society) のアメリカ通信員として選ばれた。^(一五) 此等の事柄——夫れは彼程にすぐれてゐない人々の生活には重要な事であらうが——はあらゆる詳細な點に互る迄關心を有してゐる數多い彼の友人及其の門人達に對して彼の生活に就ての描寫を完全にする爲にこゝでは述べられたものに過ぎないのである。夫等の人々に對しては、吾々は一八九四年より九五年中の二ヶ月はカブリで、又別の二ヶ月はローマで過したが——此の期間に於て伊太利に就ての讀書による知識を得る事によつて其の職務上の知識を増加したと言ふ事を附記して置かう。

彼が歸つた時には多數の仕事が待つてゐた。學部は急速に膨脹しつゝあつたし、又初步の講座を聴講する學生は五百人以上であつた。此等五百人に對し講義する事は彼の身體にとつては重い負擔である事を彼は知つたが、而し又大きな満足之源である事も分つた。何となれば、夫等の聴講生は彼に對し『多數の學生に迄行き互つて及ぼされる激勵の機會』を與へるが故である。しかし乍ら、更に一層大きな満足之源となり、一般の人々を激勵する機會を與へるものとなつたのは、彼が一八九六年に、ク

オードリー・ジャーナル・オブ・エコノミクス (Quarterly Journal of Economics) の主筆の地位に任命された事で、其の地位は一八八九年から九〇年に至る間ダンバーの居なかつた期間一時的に彼 (ダウシッグ) が占めた事があるが、今度は一八九六年から一九三五年迄彼が占める事になつたのであつた。此の點に就ては、後にもつと述べる事にする。^(一六) 其の他の點に關しては、一八九五年のクラス・レポートよりの今一の引用は夫等の期間に就ての吾々の觀察に對し結論を與へるに充分相應はしいものであらう。

『大學の採る政策に於ては、自分はカレッジの過程を三ヶ年に短縮する事を斷然主張するものである。更に又志願者達によつて申出られるであらう處の諸問題の中特にギリシヤ語に就ては優先權を與へると言ふ様な事は最早やらな』と言ふ方法で入學資格の條件を修正する事を提唱するものである。政治の上に於ては、自分は在來の黨派には愛想をつかせられてゐる無所屬の一人であり、而して中庸を得た關稅、健全な貨幣、並びに特に、官吏制度の改革及び公正な政治と言ふ綱領に斷乎として基くであらう様な新政黨の出現を待つものである。』と。

註(一) アメリカ史に關する彼の知識は實際に専門家の水準に

あつた。一八八四年には、A・B・ハート(A. B. Hart)教授休講の爲に、彼はアメリカ史の講義を行つた。しかし乍ら、其の知識は正しく専門家的のものであつたが、夫れは此の國の水準以上に大いに發展すると言ふことはなかつた。吾々が既に見て來た如く、彼はローマ法を研究し、廣く色々な讀書をした。しかし、古代史及中世史の何れもは彼にとつては生きた現實ではなかつた。

註(二) 彼は又、全く實際の諸問題を取扱つた補追の章をかつた、——夫れは充分立派なものであつた。夫れは『合衆國に於ける經濟上の諸問題』(“Economic Questions in the United States”)と言ふ標題を有し、其の十四頁に亘る一章は、關稅、國內の租稅、貨幣、銀(こゝである一人の著書の中に於ける其の人の見解に反對する場合になし得る最も強い程度に於て、ラヴレイが有する複本位制論の見解に反駁してゐる)、及アメリカの海運及航行法の論述に用ひられてゐる。

註(三) ダウシツグは曾てシユムペーターに對し可成り語つてゐる。後者即ちシユムペーターは偶々オースタラー人であり、且つボエーム・バヴエルクの門下であつた爲に、友情が其の事を語らしむるに與つて力があつたのである。しかし、ダウシツグが彼の理論的な仕事に於て引受けた方面に關しては、其の分擔せる役割は大きなものではあり得なかつた。

フランク・ウイリアム・ダウシツグの追想

註(四) 一九〇〇年のハーヴァード・インメリー(Harvard Monthly)中に於けるダウシツグの書いた讚辭『チャールズ・フランクリン・ダンバー』(“Charles Franklin Dunbar”)を參照せよ。

註(五) 一九四〇年十一月三十日號のハーヴァード校友會々報(Harvard Alumni Bulletin)に於けるバーリಂಗム氏のダウシツグに對する弔詞を參照せよ。其の點に關しては、フランシス・ボウエン(Francis Bowen, 1811-1890)はアダム・スミスと同じ境遇にあつたと言ふ榮譽を有してゐた。彼は實際に、ある種の大學者であつた。がしかし、其の事は、彼は其の當時に於ては、かゝる一般的な言葉に含まれるいかなる問題に就ても深く立入つて研究しなかつた事をも意味してゐた。彼の『經濟學原理』(一八五六年刊行。新版は“American Political Economy”なる標題を以て一八七〇年に刊行)は、價值なきものとは言へないが、夫れは彼が承認しなかつた處の英國の古典學派の理論の水準には殆んど達してゐないものであつた。

註(六) しかし乍ら、ハーヴァードに於ける此の下積みの地位は此の青年にとつては、今や夫れを完成するには非常に困難な彼の勉強を完成する上で大いに容易であつたと言ふ事實より見て、當時に於ては可成り満足すべきものであつた。

註(七) “The Report of the Class of '79, Commerce-ment 1885” 參照。

註(八) 後に『國際貿易論』に綜合された此の講座は一八八四
 十九四年、一八九六年、一八九七年、一九〇一年、一九〇
 六年、一九一三—一七年、一九二〇年、一九二一年、一九
 二三年及び一九二五—二七年の各學年度(各年の六月に終
 る)に於ては半學年單位の講座として與へられた。これは
 大學院の課程であつた。『國際貿易論』の本科の講座は—
 夫れも亦半學年單位の講座であつたが—一九二一年、一
 九二二年及び一九二四年に與へられた。

註(九) ダウシッグは現在『經濟學A講座』當時『經濟學第一
 講座』として知られてゐる講座を一八八七—一九四年、一八
 九六—一九〇一年、一九〇四年—九年、及び一九一一年—
 一五年の各學年度各年の六月に終る)に於て行つた。加ふ
 るに彼は一九二二—二八年には特別講師として協力した。

註(一〇) 此の、上級の理論に就ての講義は、一八八七—一九四
 年、一八九七—一九〇〇年、一九〇四—九年、一九一一—
 一七年及び一九二〇—三五年の各學年度(各年の六月に終
 る)に與へられた。—夫れは望々たるものである。

註(一一) 吾々はこゝに機會を得て、夫等を列記しよう。一八
 九二—一九〇〇年、一九〇七—九年、一九一一年、一九一
 二年、一九一五—一七年及び一九二〇—三五年には『第二
 十』講座と言ふのがあつた。一九〇〇年には此れは半學年
 單位の講座であつた。

更に又一八八九年、一八九六年(半學年單位)、及一八九九

年(半學年單位)には『經濟問題研究』(實際に經濟理論及政
 策論に於て選擇された諸問題)と呼ばれた講座があつた。
 夫等は

(イ) 鐵道運輸論(半學年單位、一八九一—一九四年、及び
 一八九六年)

(ロ) 銀行論(半學年單位、一八九六年)

(ハ) 租稅論(半學年單位、一八九七年、一八九八年、一
 九〇〇年、及び一九〇一年)

(ニ) そして、最後に、本科の經濟學理論に於ける半學年
 單位の講座(其の後、經濟學第一講座と呼ばる一九〇一年、
 一九〇四年、一九〇六年、一九〇八年、一九一六年

一九一七年、及び一九三〇年—三五年)。學生達はこれを以
 て一流の本科における講座と考へた。

註(一二) "Class Report, Commencement, 1895." 參照。

註(一三) ハーヴァード大學の人々には非常によく知られてゐ
 た其の家は、殆んど彼の生涯の最後の日まで残つてゐた。

(一九四〇年秋になつて始めて彼は其の家を貸し、彼の長
 女、即ちヘンダーソン夫人—Mrs. Henderson—の家(フ
 ランシス通にある)に移つた。家庭内の整理は間もなく、
 其處に一家族が落着く事により完成され、夫れが彼をして
 海岸近くに位置する立派なマサチューセッツ州コート(Co.
 tuit, Mass.)の宏壯なサンマー・ホームを利用させる事
 となつた。

註(一四) こゝで吾々はハーヴァード大學の行政事務に於ける
タウンシグの公的活動の概要を述べる事にしよう。

イ、聴講生事務取扱委員會 (Special Students) 一八九
〇—一九一一年より一八九一—一九二二年まで

ロ、他のカレッジより轉學條件決定委員會 (Admission
from other Colleges) 一八九二—一九三三年より一八九三
—一九四年まで。

ハ、課目設定委員會 一八九五—一九〇〇—一九
〇一年まで

ニ、卒業式關係行事取扱委員會 一八九六—一九
〇〇—一九〇一年まで

ホ、ボードイン奨學金委員會、(議長) 一八九九—一九〇
〇—一九〇一年まで

ヘ、課目設定及學位に關する委員會 (ハーバード附屬女學
校ラドクリフに於ける) 一九〇六—一九〇七年より一九〇八—
一九〇九年及議長として一九〇八—一九〇九年まで

註(一五) 一八九五年の卒業式に於けるクラス・レポートの中
で彼は以下の如く書いてゐた。『通信員としての地位は、あ
る點で私をアメリカの繁榮に對する頑固な、且つ叛逆的な
敵と考へさせたに聞いてゐる。しかし私は夫れを、學問あ
る立派な一群の人々からの正しい見方として承認する事に
満足してゐる。』と。——これは面白いと同様に興味ある記
事である。

註(一六) 更に編輯者としての仕事は、又一八九六年にアメリ

フランク・ウイリアム・タウンシグの追想

カ經濟學會 (The American Economic Association)
の出版委員會議長として選ばれた事にも含まれてゐる。

三、初老期(一九〇一年—一九年)

タウンシグは四十二歳になつて年の老けた事は感じなかつ
た。彼の生活に於ては、別に身體に就て痠痛に罹つてゐたり、
惱まされたり、或ひは又消耗してゐる様な點はなかつた。彼の
名聲は高かつた。可成りの程度に迄は、彼は其の宿望を滿たし
た。全くかくの如くであつたに拘はらず、更に又完全に肉體的
には健康であつたに拘はらず、彼は突然に活動する事の出來な
くなつたのを知つた。吾々はかかる場合に神經衰弱と言ふが、
夫れは實際に學問的な職業に於ては、普通の教師生活の状態に
就て考へられるも、より屢々あるのである。彼はアメリカを離
れ、外國に二年間赴き、充分に休養し一冬はオースタリー・ア
ルプス地方のメラン (Meran) で過し、今一冬はイタリーの
リヴィエラ地方 (Riviera) で過した。そして夏の間(一九〇
二年)はスイスで暮した。かくして災難は避けられ、そして一
九〇三年の秋には再び其の講義並びにクオターリー・ジャーナ
ルの主筆の職を續ける事が出來た。間もなく、彼はアメリカ經
濟學會々長の職に選任され、一九〇四年及一九〇五年の兩年は
其の地位に就いてゐた。然し夫れ丈であつた。一九〇一年か

ら一九〇五年に至る期間は彼の業績に就ての履歴に於てはフランクである。

一九〇五年末頃には、少くとも教師として、並びに學者としては、彼は從來の彼自身に再び返つてゐた。其他の點に關しては、彼は其の餘生の爲には其の力を培養しなければならなかつた。彼は教師として其の世界的名聲を打樹てた處のあの訓育方法を充分に發展せしめ、且つ高度の訓育技術を十分に習得したのはこの當時であつた。彼の研究の方面に於ては、彼が最初に選んだ分野に於ける仕事、即ち國際貿易の研究を續け、夫等の期間に彼が執筆せる論文の多數は此の分野に屬するものであつた。此等の努力の結果生れた諸成果は產業上の諸事實に關しては其の兵器庫と言はれ、又分析に就ては傑作とされてゐる處のあの立派な書物即ち一九一五年に其の初版が發刊された關稅問題の諸相』(“Some Aspects of the Tariff Question”)と言ふ書物となつて其の實を結ぶに至つた。(此の書物の増補第三版は一九三一年に出版された。)

又一九一五年には、彼は後に『發明と金を儲ける人々』(“Inventions and money makers”)と言ふ表題の下に出版せる處のものをブラウン大學(Brown University)に於て講義した。(11) 吾々の知る限りでは、本書は常に彼に興味を持たせ、且つ

彼こそ全く大いに夫れに適してゐた處の一の研究に對する最初の具體的な成果であつた。其の全分野は經濟社會學或ひは經濟活動の社會學的考察とも呼ばれ得るものであらう。制度に對する研究は夫れの中の一部分である。制度上の組織の中に於ける個人の、あるひは團體としての行動は又別の一部分をなしてゐる。そして此の廣汎な分野に於て、企業家の形態及其の行動に就ての現實的な分析は、タウシッグが時が経過して行くと共に益々其の注意を向けた處の最も重要な一聯の問題の中の一をなしてゐた。

然し乍ら、一九〇五年から一九一二年迄は彼の精力の大部分は彼の經濟學原理(“Principles of Economics”)の構成に注がれた。——此の經濟學原理と言ふのは『多年の講義と熟慮の結果であつた。』此の勞作は二卷になつて一九一二年に現はれた。夫れは大なる成功であり、且つ最も廣く利用された經濟學の教科書の一であつた。又それはかくの如く成功を收め、廣く用ひられる丈の價值があつた事は勿論である。(12) しかし乍ら其の意圖も或ひは又其の成果も其の書物の章句によつては十分に明かにされてゐない。確かに夫れはすぐれた教育上の業績であり夫れは實際に、すぐれて有能な教師の圓熟せる知識を表象せるものであつた。其の上タウシッグは自ら事實及方法以上のもの

を教授する事を引受けた。彼は問題に對する態度を、更に其の精神を教へた。彼は少くとも吾々の若干の者が問題にせんとしてゐた傳統——其の傳統とは國家の政策を形成し、夫れを批判し、輿論を指導し、望ましい目的を明確にする權利並びに義務を經濟學者に歸せしめる傳統であるが——を自ら充分に認めた。此の義務に就ては彼は最も可能な意見を有し、彼の強い性格の中に生來有してゐる責任觀念を以て其の義務を果さうとした。マリーシャルと同様に、彼も亦常に彼の時代の眞理をとび越えることなく、更に其の時代の眞理にとつての相對性の觀念を示す事なくして、彼の時代の眞理を教へた。しかも彼は印象的に、且つ最高の形に於て夫れを教へた。かくして彼は、經濟學を教ふる事は宛もヒューマニティーを教ふる事を意味すると信じた處のアダム・スミスを先頭とせる多數の偉大な經濟學者の系列に加はつた。

然しこれ丈けには限らなかつた。其の當否は別として、教科書は一般にはある一人の自身身の資料を傳へるものではないと考へられてゐる。全分野に就てのいかなる系統的な概觀も勿論かゝる資料を包含してゐなければならぬ。しかしタウシツグの論文は、全く異常な程度に於て、彼が彼自身で掘り下げた諸資料から成つて居り、根本的に彼自身の思想の諸結果を體系化したものである。この事は第四篇に就ては明かに眞實であり、夫れは國際貿易に就てこれ迄書かれたものゝ中最上のものゝ一である。程度は夫れ程ではないが、第三篇(貨幣及銀行論)、第六篇(勞働に就て)、第七篇(鐵道、工業に於ける獨占組織、公有及統制並に社會主義の如き經濟組織の諸問題に就て)並びに第八篇(租稅論)に於ける多數の個々の諸點に就ても亦上述の事は眞實である。

第一篇(『生産組織』富及び勞働、分業、大規模生産等々)は、經濟學に於ける全體的な問題を傳統の線に沿つて紹介しながら、更に資本に關する章に於ては、第二篇(價值及交換論)及第五篇(分配論)を支配する彼の個人的な特有の調子が見られ此等の諸篇は吾々が今日では、古典學派と唱へる所の體系に就てのタウシツグの獨特の見解を示し、且つ夫れは從來の古典學派(スミス——リカード——ミル)の理論と吾々の時代の理論的著作の間に存在する過渡的な段階を示すものである。彼は其の理論構成を『實銀と資本』の中に於て築かれた基礎の上に構築した。——而して彼は此の後者の著書を其の間に着々と發展せしめて行つたのである。——其の完成への最も重要な諸階梯は彼の次の諸論文、即ち『資本、利子並に、遞減する收益』(The Quarterly Journal of Economics, 1908)、『實銀論概説』

(Proceedings of the American Economic Association, 1910)の中に現はれてゐる。彼が述べた處の多くの點に就ては最近の理論家は同意する事は出来ない。ここで重要な點は彼はマイシャル、ザキクゼルの如き名前を誇つてゐる人々の第一線の中に地位を獲得したと言ふ事である。

彼の『經濟學原理』に最後の體裁を與へた仕事は悲歎の環境の中で爲されたのであつた。タウシッグ夫人の健康が暫くの間心配の種を與へた。一九〇九年から一九一〇年に至る間に、彼は一年間の休暇をとつて大學を離れ、其の期間を彼等タウシッグ夫妻はニューヨーク州のサラナック(Saranac, N. Y.)で過した。そして其地で夫人は一九一〇年四月十五日に逝つた。

然し乍ら、研究と講義が斷乎として繼續した。一九一四年度の卒業式に於けるクラス・レポートからの今一つの引用は此の期間の状況を餘す處なく述べるものであらう。——實際此の狀態は一九一七年迄變らなかつた。過去七年間の私の生活は靜穩なものであつた。冬期はケムブリッジで仕事をし、夏期はコソット(Cott)にある吾々の家で過した。自分以前と殆んど同様の課程を引續き講義し、私の精力の大部分は此の經濟學に於ける最初の課程であり、現在では大學教授課程表中の最大の選擇科目である處の經濟學第一講座(“Economics, I”)に注いでゐる。非常に出席者の多い一般的な講座は若い講師の手に委ねずに、

可成りの年輩の而も經驗を積んだ、教授陣の中の人々の處に止めて置くのが吾が學部の政策であり、實際には又大學全般の政策でもあつた。更にタウシッグは一九一二年春には、ブラッセルに於て開かれた國際商業會議所總會に於けるポストン商業會議所の代表として出席する爲、ヨーロッパに短期間の旅行をし、更に一九一二年九月にはポストンに於て開催された同總會に就ての計畫諮問委員會の議長をつとめたと引續き述べてゐる。

しかし一九一七年初頭には、彼は新たな生活を始めてゐる。夫れは短かいものであつたが、夫れ丈けに又目立つたものであつた。彼の天性は彼をして社會奉仕に適應せしめ、又廣い意味に於て彼は其の全生涯を通じてすぐれた一人の社會に於ける公僕であつた。しかし彼は約二年半の間に亘つて、新たに設立された合衆國關稅委員會の議長の職を受諾する事によつて言葉の狭い意味に於ても一公吏となつた。

新設の國家の機關を指導し、其の精神及び其の日常の課程を作り上げ、又其の傳統の中核を新たに造る事は國家の施政上に於て遭遇するすべての仕事の中で、最も困難なものゝ一である。何れの國に於てもそうであるが、特に、如何なる新な機關も其の經驗に賴り得る處の官僚的事務に就ての『老練家』が極めて稀にしか居ない此のアメリカに於ては尙ほ更さうである。アメリカ

力に於ける行政上のかゝる状態に於て、斯くの如き仕事に失敗しないと言ふ事は確かに個人の異常な人格の力を證明する事となる。其の機關（關稅委員會）の持つ半ば學理的、半ば法律적인機能に關しては、勿論タウシグは全く適當な人であり、且つ誰の話によつても彼は絶対に成功すると言はれた。同關稅委員會の本來の機能に就ての彼の考へは、其の仕事の中の事實を究明する側面を強調する事であつた。而して、彼の希望する處の調査から提案に至る迄を慎重な諸措置を以て處理する事は、將來關稅の分野に於ける立法上の活動が意見を立てる基礎としてゐた處の一方のみの陳述を斥ける様になつたであらう。かくして關稅委員會は彼の指導を受けて、關稅立法改訂の時機が生じる様な時は常に、議會に對して信すべき情報を提供出来る様に關稅法に列記されてゐる處のあらゆる重要諸物資に關する系統的な研究に着手した。今一つの計畫は一七九九年の驛馬車時代よりの遺産であり、而も現在では殆んど信じ難い程に厄介なものである處の關稅措置上の諸法律の改訂であることを示してゐる。同委員會の報告は後に其の殆んど悉くが採用された。他の報告は自由港及無稅地域を取扱つたものであつたし、又更に今一の報告は互惠並びに通商協定を取扱つたものであつたが、此等双方は單にすぐれた仕事の一部であつたのみなら

ず、更に又合衆國の政策を形造る點に於ても著るしい影響を及ぼした。此等の諸報告は又大部分は彼タウシグ一個人の仕事であつたし、又彼一個人の見解を示すものでもあつた。

彼はあらゆる合理的な諸見解に對しては虚心坦懷で、且つ夫れを受け容れる人であつたが故に、彼の有つ傑出せる權威は當然に彼をして、かゝる性質の官職に於ては普通には含蓄されてゐない意味に於て、彼の周圍のグループの指導者たらしめたのであつた。この點に就て吾々の爲し得る最も適當なやり方は、彼が同委員會を辭職した直後に明かに述べられた同委員會の第三次年度報告に於ける附記を引用する事である。夫れの述べる處は次の如くである。

『一九一九年八月一日に實際に行はれたF・W・タウシグの辭職によつて、委員會は取返しのかね損失を蒙つた。多年に互つて、彼の有する合衆國の關稅史及び關稅政策に就ての知識は他の如何なる現存の人の夫れよりも優れてゐた。此等の問題に關する彼の著書及數多くの論文は、研究家及立法者が長く其の指導として頼るべき立派に解明された知識の集成されたものとなつてゐる。同時に彼の行つた仕事及び彼の見解は専門家の有する偏狭なものを少しも示してゐなかつた。其の理由は、彼の他の分野に於ける廣汎に互る學識及び實業

界の諸事情に精通し、且つ實業家と親密であつた事が彼をして關稅政策の意義並びに關稅手段の詳細な點を正しく判斷せしめ得たのであつた。彼は教育者や理論家の有する洞察力和實際の實業家の有する穩當な判斷及常識とを大いに兼ね備へてゐたのであつた。此等の諸能力に加ふるに彼の有したものは強い個性と大なる精力とであつた。大統領によつて彼が關稅委員會の議長として選ばれた事は廣く一般に満足を與へ、且つ各方面に於て同委員會の事業の公正、正確並びに有益なる事に就ての信頼を起させた。二年以上の期間に亘つての少なからぬ個人的犠牲を敢てして、彼の有つ知識は同委員會の組織を形成し、其の調査に着手し、且つ夫れを計畫し、其の協議事項を指導し、更に其の活動を指示する點に就て缺くべからざる助けとなつた。」と。

合衆國が參戰すると共に、第一次世界大戰への參戰を指す——譯者）タウシッグの責任は間もなく關稅委員會に關する仕事以外の方面にも擴大せしめられた。彼は戰時產業局の價格制定委員會の一員となり、又暫くは食糧管理部の製粉部に勤務し、更に後者の罐詰工業に關する小委員會に勤務した。間もなく負擔が彼にとつて餘りにも大きくなつて、彼は夫れを縮少しなければならなくなつた。しかし乍ら、大統領ウィルソンの依頼に

よつて、彼は關稅委員會の議長と共に、價格制定委員會の一員たる地位は保有してゐた。

大統領ウィルソンは、かくも有能な、公共心に富んだ、且つ公平な忠告者の協同が有つ價值を充分に知つてゐた。彼等の間の關係はかくの如くであつたが故に、既に早くも一九一八年一月には、タウシッグは、はるかに其の官吏たるの義務以上に、此の問題に關する彼の意見、特に合衆國の戰爭目的に關する彼の意見を大統領に提案し得ると考へた。かくして彼が招かれて平和條約諮問委員會に入つた事は殆んど當然の事であつた。又關稅及び通商協定に關する後者の小委員會は彼の特に割當てられたものであつた事は全く當然であつたが、然し彼は經濟上の諸規定に關する總會に出席し、且つ其の會の立案者としても活動した。彼は又其の他の外國の、並びに國內の諸問題に對しても援助を與へ、且つ助言を與へた。

彼は正義と公正を標榜せんと深く決意してバリに赴き、其の心構へに於ても全く復讐心を抱いては居なかつた。彼の公的な權限内にある多くの個々の諸點に就ては、多數の不合理な要求を巧妙に抑へた處の決定的な、且つ有益な影響を及ぼす發言を主張し得た事は確かである。しかし正確には其の影響はどれ
(四)
だけ及んだかと言ふ事は吾々は全く知る事はないであらう又吾

吾は、彼が平和條約の不吉な諸條項に就て考へ、且つ感じた事に就ては、彼がボストン、ユニタリアン・ソサイエティー (The Unitarian Society of Boston) に對し "A Human story of the Peace Conference" なる題目の下になした講演以外のものは全く正確には知らないのである。^(五) 彼が夫等の期間に故郷に書き送つた其の愉快な、且つ可成り氣輕な書翰の中に於ては、日常の先づ爲さねばならない仕事及び日々の觀察した事に就て語る丈であつた。彼が爲し、且つ考へた事の一部は恐らくは彼と親しく話し合ふ事から再び構成する事が出来るかも知れない。しかし彼は其の仕事に於て分擔した自らの役割の事は決して詳述しなかつたし、更に彼の批判的な評論に就ては嚴に差控へた。吾々の若干は此の事を遺憾とするであらうが、夫れは此のタウシングと言ふ人のすぐれた特徴であつた。彼が行ひ、或ひは語つた事に就ては、どの點に就ても、深い責任觀念に驅られてゐた。彼は、自ら協同した所の人々は誰をも決して『失望させる』事はしなかつた。

一九一九年六月に歸國するに先立つて、彼は關稅委員會を辭職する事を申し出た。實際に夫れが實行されたのは八月であつた。しかし彼は一九一九年から一九二〇年に亘つて大統領附屬産業諮問會議の爲に勤め、又一九二六年迄は "Sugar Equality-

nation Board" の爲に働いた。^(六)

註(一) 其の當時、彼は又ブリテイッシュ・アカデミー (British Academy) 及びアカデミア・デイ・コンギイ (Accademia dei Lincei) の會員 (Fellow) として選ばれた。目下取扱つてゐる全期間に亘つて彼に與へられた其他の數々の榮譽も亦彼の立派な名聲を立證するものである。彼は一九一四年にはブラウン大學 (Brown University) から文學博士 (Lit. D=Literarum Doctor) の學位を受け、更に一九一六年にはハーヴァード大學からも同じ學位を受けた。

註(二) 序に、吾々はこゝで、彼は又一九一六年にはカリフォルニア大學 (California University) の夏期講座で連續講義を行つた事をも述べて置かねばならぬ。

註(三) 戰爭の影響を考慮に入れて改訂された第三版は一九二一年に出版された。又日本譯は一九二四年に出版された。大部分に亘つて書き改められた第四版は一九三九年に出版された。其の獻辭は次の如く書かれてゐた。即ち『吾が親愛なる父上に、感謝に満ちる子供より』 ("Patri Directo Filius Gratus.") と。

註(四) 不合理な要求に對する若干の讓歩が、彼の忠告にも拘はらず爲された様に見えるけれども、關稅並に (通商) 協定に關する多くの小さい諸問題は實際は英國の示唆に基くもので、夫等は調停者として彼が決定する様に殘されてゐたのである。

註(五) 此の講義の概要は一九二〇年にクリスチャン・レヂス

ター (The Christian Register) に載せられた。

註(六) 完全な記述を期する爲、吾々はこゝで彼がベルギー王

冠勳章 (Belgian Order of the Crown) の佩用者並び

にフランスのレヂオン・ド・ノール勳章 (Legion of Honor)

の佩用者とされたと云ふ事を述べて置かう。

四、輝ける晩年(一九二〇年—四〇年)

六十歳になつてタウシツグは、彼の講義をし、且つ研究をする爲にハーヴァード大學に復歸したが、其の名聲は尚ほ高く、且つ若若しさを有してゐた。そして彼は明かに、其の若かりし時の誓であつた處の最後まで『ケムブリッヂに住み、且つハーヴァードの爲に盡す』と言ふ事を實行せんと決心してゐた。

再び彼の生活の流れは従來の方向に注ぎ込まれた。彼の當時は愉快な仕事で一杯であり、夫れは時には短距離の健康的な散策によつて中斷されたり、又夏季はコット (Cott) に於ける長時間の水泳と日光浴に中斷されたのである。夜間は、折々の演奏會を樂しみ、夫れよりも更に屢々來客を持つたが、夫れは大抵は、第一には學究的な部類に屬する男子の來客であつた。其の來客達を彼の強い個性が柔しく率いて、彼の處におけるデイナー・パーティーは教室の空氣のある一部を分け持つて

ゐると言つて良い位であつた。彼の愉快な、且つ寛大な性格は、威厳を持つた遠慮と言ふ覆の下から現はれ、かくて彼は其のあらゆる美德と、其の愛すべきほんの僅か許りのマンネリズムを持つて吾々の記憶に残つてゐる最愛の指導者となつた。⁽¹⁾一九一八年に、彼はラウラ・フィッシャー (Miss. Laura Fisher) と結婚したが、今後の十年以上もの間、彼女の親切が彼の家庭を晴れやかにし、此の偉大な學者を讃美し、情誼を感じ、且つ崇敬して、彼の許に敬意を表する爲に訪れた青年達を勵ました。彼の職業上に於ける諸活動の中で、此のジャーナル (The Quarterly Journal of Economics) の編輯は益々顯著な地位を占めた。ジャーナルが彼に對して有した意味並びに彼がジャーナルに對して有した意味と言ふ二つの理由から、彼の盡力並びに其の成功を明かにする爲に、暫時の閒語の事が當を得た事である。一八九六年から一九三六年に至る迄、——健康を損つた二年間は除いて、僅か數回の短かい中斷の時期があつたが——彼は幾まざる熱意を持つて原稿を讀み、夫れを批判し、寄稿を勧誘し、改善の爲に示唆を與へる事に専心従事した。其の上 A. E. モンロー教授 (Professor A. E. Monroe) が一九二九年に其の仕事に加はる迄は、書記以外の他の人の援助を殆んど得ないで彼は自ら仕事をした。彼の成功は著るしいものがあつ

た。彼が此のジャーナルに就て維持してゐた水準、或ひは夫れが全世界に亙る科學的な經濟學の發達に與へた寄與に關しては何等疑の餘地はあり得ない。

かゝる成功は極めて稀な事である。實際に、吾々の經濟學の分野に於て、編輯者がタウシッグの水準に達したと言ふ他の例を考へる事は極めて容易な事ではないであらう。此の方面に於ける彼の成功の秘訣を明かにする事は、彼の個性を明確にすると言ふ事であり、其の個性に於ては其の強さと宏量な事が極めて適切な結び付きを形成してゐたのであつた。彼はジャーナルを指導するには、斷乎たる手際を以てし、且つ編輯委員會によつて妨害せしめられる様な事はさせなかつた。彼は屢々助言を求めたが、常にかゝる忠告とは可成り別箇に彼自身で決定した。かゝるやり方をせんとする人、更には自己の意見を強く主張する人は往々にして狹量になり勝ちであり、又命令的になり勝ちである。しかし彼は其の何れでもなかつた。彼は夫れを見た時に、其の能力を知り、彼は夫れを有してゐると主張した。彼にとつては、彼が筆者の方法及び其の結果を好むか、好まざるかは夫れは全く重要な事ではなかつた。此れの顯著な例は數理學派の人々の寄稿に對する彼の取扱ひ方である。數理學派の經濟理論に對する彼自身の態度は、たとへ夫れを好まないと

言ふ程ではなくとも、夫れに就ては一種の懷疑的なものを有してゐた。しかも彼はジャーナルに對してヘンリー・L・ムーア(Henry L. Moore)の論文を歓迎した。そして彼の主筆の最終の年に於ては、其の方面で此れ迄なされた最も數學技術的な作品の一つをも喜んで受け入れた。又これだけと言ふのではなかつた。又彼は非常に巧みな方法で、今日の關心事に關する論文が學術雜誌の如何なる編輯者に對しても提供する諸問題に臨んだ。勿論、彼は、此のジャーナルが其の時代の問題と接觸を保つてゐると言ふ事は望んでゐた。しかし彼は一般原則に照らして論述する處の問題に關する寄稿を好んだ。而して彼は何等かの點で永久的な興味のあつた寄稿を得ようと試み又通常夫れを得てゐた。又(新刊)批判の問題に就ては、彼は慎重に選擇した書物に關する批評論文をむしろ好み、かくして編輯者の進むべき進路に付きまとい別諸困難を回避した。水準を他から受け入れるのではなく、自ら夫れを置いた處の此の努力家の編輯者は其の職業に就ても師匠となつた。しかし乍ら、目下問題となつてゐる期間を回顧する場合に、吾々が彼タウシッグに就て考へてゐるのはハーヴァード大學に於ける學生の教師としての彼である。終始、吾々は彼の全心、全力が、他に匹敵するもの、ない仕事に傾注されて來たと云ふ事を強調した。勿論、彼は自

身で國際貿易の分野に於ては一學派を形成し、又經濟上の諸問題に就ての彼の全般的な洞察力の有する影響は限なく廣汎なものであると認められるけれども、確かに彼は其の學說に就て學派を形成する點に於ては唯に相匹敵するものを有したるのみならず、更に又夫れ以上に優れたるものをも有してゐた。しかし乍ら、講義術に就ての練達者としては彼は合衆國に於ても、或ひは他の何れの國に於ても匹敵するものを有たなかつた。今や彼の（講義）方法を明確にせんとするに適當な時期である。

彼は廣汎に互る種々の諸問題を教授したと言ふ事は既に吾々は見て來た。彼は又チューター（Tutor）としても活躍し、そしてすぐれた、且つ強い刺激を與へる訓育者であつた。

しかし教師としての世界的名聲は、學說の講義に關聯しての夫れであり、夫れに就ては彼の述べる處は一九二八年以來の事丈けに、而も特に彼が好んだ（大學院に於ける）講座即ち『經濟學第十一講座』の事丈けに限つてゐる。——此の講座は多數のアメリカの學者の心構へを作り上げ、夫れは又アメリカの各大學に於て廣く模倣されたものであつた。而してこゝで彼の得た成功は、クラスに於ける討論と言ふ方法によつて達成されたものであつた。此の方法並びに彼の選んだ資料の兩者は、彼の考へた且つ彼が形造らんとした處の科學的な經濟學の立場に理

想的によく適合したものであつた。

彼は、經濟理論は他の如何なる學問の理論的な部分とも同様に、單に一の手段の、あるひは一の哲理の貯藏場所ではなくして、夫れは夫れを以て現實の生活に於ける經濟上の様相を分析する一の道具であると言ふ事を認識した最初の一人であつた。ここに於て教師の任務なるものは事實に對する一定の觀察方法を與へ、心構に就ての一の習慣を與へ、又吾々が事實に呼びかける處の諸問題を明確にする術を與へる點にある。然し此の道具を知るのみでは充分ではない。學生は又夫れを取扱ふ事をも學ばねならない。此の目的を達成せんとしてタウシッグの用ひた方法は、彼自身好んでソクラテス的方法と呼んだ處のものであつた。クラスの各集會に於て、彼は、いかにして興味を持たしめるかを立派に知つてゐる處の特殊の問題に對する議論を第一に初め、而して從來誰もが有たなかつた、且つ將來も持つ事がないであらう處の好意ある嚴格さを以て其の議事の進行を指導しつつ、學生をして夫れを徹底的に討論せしめた。彼の講義の爲の集會から歸つた時、彼は曾て一友人に次の如く語つた。『自分は今日の自分のやつた事には満足してゐない。自分は自身で多くを語り過ぎた。』と。

彼が其の資料を選ぶ場合に於ては、彼が實行した方法は過去

の學說と將來の學說との中間の道を進んだ。彼の時代には普通に『古典學派經濟學』と言はれるもの（一七七六年—一八四八年の間に於ける主要な英國の經濟學者達の學說及び方法を指す）は徐々に其の前景から離れつゝあつた。夫れにも拘はらず、一方に於ては、實際には比較的最近の學說——元來は本來的にはマーシャルの學說——を講義し乍らも、彼は常に古典學派の背景を見失はぬ様にして居つた。更に彼の時代に於ては、最近異つた形態の經濟學を生み出した處の新たな諸傾向が現はれつゝあつた。夫等の發達には彼は注意深く隨つたが、而も前述の基礎が安全であると考へた點より以上には進まなかつた。此の方針は教師として得た彼の驚くべき成功と大いに關係があつたのである。彼は僅か少數の人々のみに興味を持たせたであらう様な洗練さは避け、同時に又明確に舊式となりつゝあつたものからも決然と離れた。學生達が彼を愛し、又彼は知識と經驗に就ての充分な權威を以て語つたと言ふ丈けでは充分ではない。かくの如き敘述の意味する處のものよりもはるかに、彼は彼の周圍に寄つて來た何れの人々に對してもある一種の彼の度量の廣大な事並びに公務に對する彼の高邁な思慮を感じさせる事に成功した。

以前と同様に、彼の晩年の十年間に於ける其の研究の成果は

三つの部分に分れた。其の第一は、一九二〇年から一九三四年に至る迄の間に彼に歸せられる處の約六十の出版物の中で、其の大多數は國際貿易の問題に關するものであると吾々は言つて差支へないであらう。關稅委員會並びに戰時及戰後の諸問題に關する彼の仕事の結果が勿論大きなものであつた。——夫等の經驗は實際に、單に興味ある應用の機會並びに彼の諸見解を立證する機會を與へるのみならず、更に又新たな進歩を招くものでもあつた。^(註)諸論文を集録した一冊の書物たる『自由貿易、關稅並びに互惠主義』（"Free Trade, the Tariff and Reciprocity"）と言ふ著書は一九二〇年に現はれ、そして一九二七年には、一冊の大作、即ち彼の『國際貿易論』（"International Trade"）を公刊する事によつて其の問題を講義する事に別れを告げた。尤も夫れは斷じて其の問題に對して有する彼の關心にも別れを告げたと言ふのではなかつた。^(註)

其の論文は若干の新奇な點を含んでゐる。夫れはこゝでは論じ得られないが、而し夫れは大體に於て、此の分野に於けるダウシツグの勞作及び講義の大部分を此の上ない明白さと、強い力を以て概括してゐる。其の著作が有つ堂々たる構造を其の正當なる價值に於て評價するが爲には、現在の理論家にとつて常に障礙物である處のものゝ有つ重要性を、其の眞實の程度にま

で還元する事が先づ第一に必要である。國際貿易に關する純理論は、確かに根本的な改造の途にあり、夫れは必ずタウシッグの使用した手段の多くを廢止するに相異なるのである。彼タウシッグすらも、若干の根本問題を明かにする爲には役に立つと考へたが、しかし多數の最も危險な補助的な假定を用ひなければ支持され得ない處の價值論に於ける投下勞働量説から出發したのであつた。此の事は多くの人々の眼には、彼を一個の『古典學派の人』として銘記させるのである。しかしかゝる上述の技巧は大いに彼の關心を唆つたと言ふ事は決してなかつた。彼は其の學問上の洞察力を完成するに手許にあると考へたすべての手段を以てし、而して此の後者のものがリカードウ流の學說であつても、其の使用者はある點では彼の時代よりもずつと進んだ時代の人である。——例へば原料の國際的配置に就ての彼の堂々たるプランを眺めて見よ。實際に彼に興味を持たせた處の實際問題に就て彼の得た成功は驚くべきものであつた。而して又、批判者達は廢れた道具を手離さうとするのを所有者が嫌つてゐる場合よりも、むしろ其の廢れた道具が所有主の手に在つて爲し得る事に驚くべきであらう。

しかし乍ら、理論が其の業績の全部ではなかつた。理論は其の業績の主要な部分で足りないのである。彼のものであつた處

の廣い（研究）範圍、該博な知識、政治的意味に對する鋭敏な評價を無視し、且つ彼の仕事の中の純粹な學問的な側面に限るとしても、吾々は計量經濟學（Econometrics）の精神を以て彼自身が研究した方法及び其の多數の門下を指導して研究せしめた方法は讃嘆せざるを得ないのである。理論は其の後に『事實』を伴ひ、或ひは又彼が好んで述べた如く、『證明と言ふ問題』を伴ふのである。夫れ故、こゝでは時系列分析が、——尤も純粹な種類のものではあるが——獨特のものとなつてゐる。しかし彼は計量經濟學者達の普通に考へてゐる事に比べてずつと優れてゐる。彼は、彼自らの分析を以て經濟史研究の一手段たらしめ、かくて大いに有望なる將來へ導いてゐる。こゝに於てはも早や理論上に於ける無智が經濟史家の有すべき榮譽の表章でもなければ、又史實的に無智なる事も決して理論家にとつて其の榮譽を表章するものではない。

彼の研究の第二としては、彼は一九三二年に出版された『アメリカ實業界の指導者傳』（"The Origin of American Business Leaders" C. D. Johnson 博士との共著）に關する仕事によつて別の目標を打ち樹てゐる。吾々は、吾々の經濟社會學と名付けたものに對するタウシッグの關心が増大してゐる事を既に述べて來た。個人の行動、或ひは又夫れへの動機と

言ふものが先づ第一に彼を惹き付けた。夫れから更に、彼は他の研究に移つて行つた。彼は、社會が、基本的な社會の機能であると言ふ點に於て——例へば封建社會に於ける武士の機能の如きはこれであつたが——其の指導者達を選ぶ方法が社會にとつて最も重要なものゝ一であり、即ち社會の運命に對すると同時に、又社會の活動にとつても最も重要であると言ふ事を認識してゐる少數の經濟學者の中の一人であつた。そして彼は、質問提示の方法によつて、自力で成功した人々及び其の後繼者の役割がアメリカ産業に於て實際に如何なるものであつたかと言ふ問題に關し廣汎に互る報告を蒐集する事によつて此の前述の問題に取組まんとする大膽、且つ獨創的な企てを行つた。吾等は、タウシグが其の集まつた諸資料から推論せんが爲に用ひた諸方法の功績に就て如何に考へようとも、かゝる冒險的な事業に其の眞の意義を與へた處の廣汎な見地から見れば、此の研究は全く先驅者の事業であり、又夫れは天才人による考察であると言ふ事實は見逃す事は出来ない。

彼の研究の第三としては、彼の理論上の仕事場から生れ出た二つの寄稿論文が擧げらるべきである。其の一は『生産費曲線の研究に對する一寄稿』クオータリー・ジャーナル、一九二三

年」と言ふ論文で、これは、其の問題が可成り最近に得てゐる重要性の故に、注目される價值のあるものである。夫れは關稅委員會に於て爲された仕事の結果であり、"bulk-line cost curve"の理論を提示した。かくの如き特殊の理論は確かに成功ではなかつたが、しかし再び夫れは嚮導者となつた。第二の論文、即ち『市場價格は確定的なりや』と言ふのは學說に別の刺戟を與へた。吾々の知れる限りに於ては、タウシグは、經濟學が、若しも夫れが數量的に動き得るものとされるならば、夫れは、早晩は、個々の散在せる點の形で動くと言ふよりはむしろ、相並ぶ（連續的な）列と言ふ形で動き、普通の意味に於ける函數を以てと言ふよりは、むしろ一定の幅を以て動かねばならないであらうと言ふ事實に直面した最初の人であつた。かかる序論は今迄の處は夫れ程に追求されなかつた。其の理由は夫れは全く新しい技術を要求すると言ふ立派な理由があつたからである。しかし、何時の日にか、此のタウシグの『半影』——夫れは彼の最も巧みな用語であるが——は當然受けるべき正當な地位を得るであらう。

しかし、『脱れ得ぬもの』——タウシグはこの様に呼んでゐるが——が其の影を投じ始める時期が近付いてゐた。主要なる

仕事は一九三二年以後のいつれの年にも始まつてゐない。教室に於ては彼は尚ほ立派な講義を行つた。しかし徐々に彼は其の支へを失つて行く危険を認識し始めてゐた。彼の如き性格を有つ人間にとつては、——即ち其の人の生活即其の仕事である處の人にとつては——夫れははげしい苦痛であるに相違なかつた。しかし彼は躊躇しなかつた。一九三五年に彼は其の椅子から退き、更に一九三六年には此のジャーナルの主筆たる職をも退いた。^(六)其の後彼は退職の辭を書いたが、その中で以下の如く述べた。

『吾が同僚達及び友人達は、彼等が非常に残念に思ふと言ひ、且つ彼等の親切な言葉は私をして長い間愁の目的としてゐた所のものを遂行する事に成功したと思はせて呉れた。——人が尚ほ見かけ丈けでも少しは率直さを以て「誠に残念だ」と言ふ時に退くべきで、其の人々が全く率直に「もう良い時期だ」と言ひ得る様な時まで待つべきではない。』と。

特に此のジャーナルの編輯と言ふ仕事は彼の生活から離れた時、彼がこれ迄熱望してゐた仕事は彼を待つてゐたと言ふのは全く願つてもない幸な事であつた。彼の『經濟學原理』は長い間、彼にとつては非常に氣にかゝつてゐた問題であつた。第三版（一九二一年）に於ける改訂は急いで爲されたもので、決して彼を

満足せしめたものではなかつた。『一九一四年以後の期間に於ける巨大な經濟上、及び社會上に於ける變動に鑑みて見れば、殆んど如何なる問題に就ての取扱ひ方も以前と全く同様ではあり得ないのである。』^(七)かくて彼は其の殘されてゐる力をさゝげて部分的には其の書物の全部を書き直しつゝ、而も第三篇（貨幣及銀行論、及び第五篇（分配論）は全く改作して、此の書物を改訂すると言ふ骨の折れる仕事に専心従事した。有能な共力者を得て、彼は此の書物の最終改訂版を成し遂げ、一九三九年三月には序文の祝福の辭を書き上げる事が出来た。全般に互る構造、其の觀察及び研究方法は變更せしめられなかつた。更に又理論的構造の基礎も變更せしめられなかつた。

全く思慮深く上の様にされてゐた。經濟學者としてのタウシッグの事業は其の歴史上の地位を有してゐる。彼の事業は決して消滅する事はある得ない。夫れは得體の知れぬ折衷主義によつて其の強い特徴を抹消する事はしなかつたであらう。夫等の特徴は、若し吾々が夫等をアメリカ經濟學の發展に照らして眺めるならば、印象的に目立つて見えるのである。アメリカの經濟學の發展の初期に於ては古い實際的知識の所有者達が居た。即ち夫れはハミルトン(Hamilton)及彼に似た他の人々が夫れであつた。しかし乍ら、人々が理論を究める以前に爲すべき他の

事柄を有してゐる事情の中に於ては當然の事ではあつたが、其の國で生れた理論經濟學は發達しなかつた。又こゝにはダニエル・レイモンド(Daniel Raymond)風の保護貿易論者にしてスミス學派の人も居たし、後にはヘンリー・ケアリー(Henry Carey)の如き獨創的ではあるが未熟の學者がゐた。南北戰爭、或ひは其の邊りから以後、事態は、最初は徐々に、後には益々急速に前進し始めた。いかなる他の人々の名前よりもタウシッグの名前が此の變化を成しとげた發展とより一層の關聯を有してゐる。しかし彼の發育期中に於ては、タウシッグは眞面目な思想を尊重した他のすべての人々と同様に、先づ第一に、ミルが教へた同じ方法で、イギリスに於ける學問を學ばねばならなかつた。マーシャルと同様に、彼タウシッグもミルから其の原理を得た。しかし乍ら鋭敏な頭腦を有してミルを読む人は誰しも其の肩越しにリカードウの偉大な姿を見るに相違ない。そして、すべてを受け容れて模倣すると言ふ心構ではなく、創造心を以てリカードウに依ると言ふ心構を以て、タウシッグは彼の指導を受け得ると考へる處の他の人々と類した精神を持つてゐた。リカードウ的な手段を以て出發した他の人々にとつて現はれたと同様の諸困難——夫等の中でも特にマルクス——は彼の前にも當然現はれた。そして彼タウシッグはかの有名なりカードウ

フランク・ウイリアム・タウシッグの追想

の『原論』第一章第四節に取りかゝつてゐる中に、彼はボエーム・バヴェルクの著作に考へつた。——夫れは確かにタウシッグを助けて資本理論——夫れは同時に貨幣理論でもあつたが——を完成せしめた。マーシャルと同様に、——此の人の進路はタウシッグと異つてゐたが、又根本的には並行的なものであつた——彼も好んで效用の分析は行はなかつた。——僅かに夫れはマーシャルよりも尙ほ少なかつた。しかし彼は『勞働の限界生産性』なる一句が示す點に迄彼の貨幣論を發展させて行く場合に何等の困難をも感じなかつた。一度び此の點に達するや英國のマーシャルと米國のマーシャル(タウシッグを指す)の間の類似は尙一層明白となつて来る。此の二人は、一八九〇年代の理論物理學に適用される——即ち技術的な限度を示すと同様に、又直線的美と單純性を示すと言ふ意味に於て適用されるのであるが、——と言ふ意味では古典的であつた處の分析に就ての原理を構成する點に成功した。此等二人は、其の原理をして史的觀察を爲さしめ、且つ彼等の時代における焦眉の問題を解決せんとする熱心な欲望の爲に奉仕せしめた。此の二人は相互に尊敬し合つた點で正しく、且つ如何なる點に就ても相互に屈從し合はなかつた點で正しかつた。

『經濟學原理』の新版の完成は尙ほタウシッグの生涯に、彼が絶

に、安らかに、而も苦しむ事もなく彼は逝つたのである。

えず満たさうと努め、而も満たし得なかつた大きな空虚の場所を残した。無爲にして休息する事は彼には與へられなかつた。彼は、尚ほ彼にとつては爲すべき仕事があると云ふ事を考へるのを止めなかつた。實際に又、そう言ふ仕事は尚ほ存在してゐた。彼の生涯の最後の言葉程に價值を有つたものは他の人の夫れの中には殆んどなかつた。しかし彼は急に努力を續ける事は出来なくなつて來た。そして——吾々は既に引用して來た彼の父の生涯に就てのスケッチを除いては——彼が爲し續けてゐる痛々しい努力からは何物も生じて來なかつた。彼は死ぬ迄活動を續けてゐるべき人間の一人であり、彼には『シメオンの頌』(Hymne Dimitis)は決して調子の合つた響きは持たないであらう。

しかし其の最後に至る迄、彼は全く驚くべき程に、老齡の持つ共通の苦痛を感じる事はなかつた。彼は完全な視力、完全な聴力、全く害はれてゐない歩行力、及び水泳する力を有つてゐた。彼は又氣に懸つてゐる個人的な苦惱は少しも持たず、家庭の中では幸福であつた。此の家庭の人々が最後にコツト(Cotuit)に於て彼を中心を集つたのは一九四〇年の夏であつた。何時もの、學年の始まつた時に、彼はケムブリッジに歸つた。其處で彼は發作に罹り、一週間以上も彼は人事不省のままであつた。再び意識を収戻す事なく、一九四〇年十一月十一日

註(一) 吾々は、こゝで彼がノースウェスタン大學(North Western University)から一九二〇年に文學博士(LL.D.)、ミシガン大學(Michigan University)から一九二七年に文學博士(LL.D.)、ボン大學(The University of Bonn)から一九二八年にドクトル・オヴ・フィロソフィ(ph. D.)、そしてケムブリッジ大學(Cambridge University)より一九三三年に文學博士(Litt. D.)の各名譽稱號を受けた事を述べて置かう。此の中でも、最後の事柄は彼に最大の満足を與へた。彼は其の學位を受ける爲に英國に渡り、其の國に滞在中全般に亘り、更に特に其の授與式に於て全く満足せしめられた。——一九二〇年には、彼は、"Phi Beta Kappa"(前掲)のノーヴァード支部の支部長に選ばれた。

註(二) 一九二五—六年から一九三一—二年に至る間に、タウシツグは少數の優等學生との間に協議會を開催した。其の規定は一學生に一つの會合と言ふのであつた。大學要覽("College Catalogue")の記す處によれば、彼は一九二七—八年から一九三四—五年までテューターであつたと記してゐる。

註(三) 特に『減價せる紙幣の下に於ける國際貿易』("International Trade Under Depreciated Paper" The Quarterly Journal of Economics, 1917)に關する彼

の重要な論文を参照せよ。

註(四) 佛譯一九二四年刊行。

註(五) 獨譯一九二九年刊行、日本譯一九三〇年刊行

註(六) “Henry Lee Professor Emeritus” (ハントリー・リ

ー講座名譽教授)と言ふ稱號が彼に與へられた。一九三六
七年の間、彼はハーヴァード大學校友會々長に選ばれた。

彼の門下生及友人は、彼の七十七歳の誕生日を祝賀して、
彼に『經濟學探究』(“Explorations, in Economics,
1936”)なる標題を持了一卷の論文集を贈呈した。

註(七) 第四版序文より。

(附記)

本追悼論文の資料蒐集に當つては吾々はダウシツグの多數
の友人達及び近親の人々より援助を受けた。特に吾々は
ダウシツグの令妹アルフレッド・フランデイス夫人(Mrs.
Alfred Brandeis)ダウシツグの令息ウィリアム・G・ダ
ウシツグ氏(Mr. William G. Taussig)及びダウシツグ
の友人にして其の同級のチャールズ・G・バーリンガム氏
(Mr. Charles G. Burlingham)に對しては深く感謝
の意を表し度い。ハウル・M・スウィージー博士(Dr.
Paul M. Sweezy)は親切に“the Publications of
the Class of '79”よりダウシツグに關する諸資料を編纂
して呉れたのである。ダウシツグの父に關する多數の資料
は一九四一年(冬期號)のハーヴァード・ビジネス・レビュー

フランク・ウィリアム・ダウシツグの追想

に載録されたダウシツグ自身の論文、即ち『吾が父の實業
界に於ける生涯』(F. W. Taussig, “My Father's Busi-
ness Career,” Harvard Business Review Vol XIX
No. 2 Winter Number)より得たものである。

ダウシツグの著作文獻に就つては『經濟學探究』(“Explora-
tions in Economics, Notes and Essays contributed
in Honour of F. W. Taussig, 1936”)なる書物の附録
を参照され度い。